

京都女子大学図書館蔵

施諸餓鬼飲食及水法平安後期点

西 崎 亨

1

京都女子大学図書館に『施諸餓鬼飲食及水法』と題する一典籍が蔵されている。『施諸餓鬼飲食及水法』一卷は、施諸餓鬼飲食及水儀軌、施餓鬼飲食儀軌とも称されるもので、唐の不空の訳になるものである。大正新修大藏經（第二一卷密教部四、一三二五）に、『施諸餓鬼飲食及水法并手印』として収められている。大正新修大藏經には、施食法を説くものに、一三二三『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』（別称、焰口餓鬼陀羅尼經・焰口餓鬼經・焰口經）、一三一四『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪經』がある。因みに、福田亮成は一三二三と一三一四については『大藏經全解説大事典』において「関連典籍」と注記する。

京都女子大学図書館蔵の該本の書誌は次の如くである。表紙に「施諸餓鬼飲食及水法」とあり、内題にも「施諸餓鬼飲食及水法」とある。因みに尾題はない。

施諸餓鬼飲食及水法

大興寺三藏沙門大廣智不空奉詔譯

先出衆生食事須知法周帛種種

皆著並須淨好一分或分許或一

器皆須安淨銅器中如法如瓦銅器

白瓷器得如瓦瓷器可用漆器其飲

食須和清水面向東五生忌得作法

支欲施一切餓鬼飲食者先須發願

(二丁表)

全 一三丁からなる粘葉装本一冊

縦 一七・三糎 横 一五・七糎 界

高 一四・二糎 界幅 一・七糎

一葉 八行 一行一二字〜一四字

一三丁オモテに次の奥書が存する。

仁安四年三月廿八日申時許書之

了(墨筆)

一交了(墨筆)一點了(朱筆)

沙門覺隆之本(墨筆)

右の奥書によつて、該書は、仁安四

(一一六九)年に書写され、同じ時期

に校合、加点が成されたことが明らか

である。因みに、「沙門覺隆之本」と

ある「覺隆」については、『中右記』

保延元年二月及び三月の条に、

近日東大寺と興福寺不和之事出

来、衆徒欲競発也、事元者東大寺

末寺財良寺在伊賀国々司光房在興

福寺弟覺隆ニ成也、仍以東金堂之衆遣彼寺之処、從東大寺又遣使、陵礫堂衆之由風聞也、仍興福寺欲乱発間、可
行東大寺僧罪過之由被下院宣也、仍大衆成悦留了也、国司光房所為甚以不便也（二月四日条）

東大寺末寺伊賀国財良寺、国司光房我弟興福寺僧覺隆ニ成之間、又徒東大寺遣僧侶陵礫覺隆使東金堂衆故也

（三月六日条）

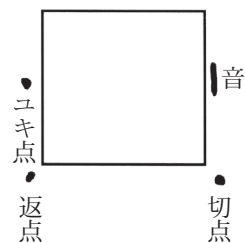
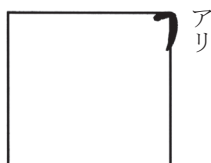
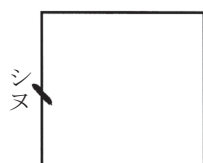
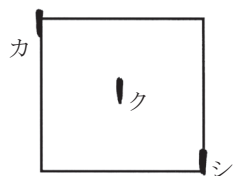
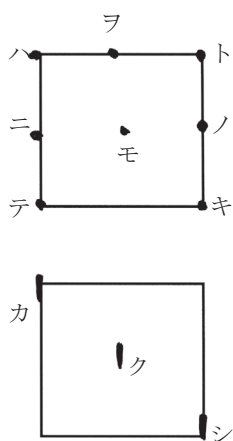
の如く見られる興福寺僧覺隆であろうか。『中右記』記載の覺隆の記事が、覺隆の何才の時のものであるかは詳らかで
はないが、保延元（一一三五）年の記事であるので、仁安四（一一六九）年の書写になる本点との関係では問題はな
いと思われる。

2

本書の訓点については次の如くである。

奥書識語の「二校了」・「二點了」は墨筆・朱筆によって記されているが、朱・墨に対応して訓点は朱筆・校合は墨筆によ
っている。

朱点には、ヨコト点・仮名点がある。



ヲコト点は、右図のように帰納できるが、その種類は多くはない。所用ヲコト点は東大寺三論宗点である。

東大寺点は、「すべてが醍醐寺、石山寺、勧修寺、高野山など、真言宗系統（しかもその中でも比較的小野流が多い）の加點本でしめられてゐる」（『平安時代訓點本論考 研究篇』）とあり、上記の寺院に纏められる点本の「大部分は密教関係の聖教類の加點本である」（『平安時代訓點本論考 研究篇』）とある。

ところで、沙門覺隆を興福寺の僧と仮定すれば、興福寺は法相宗の寺院で、平安時代後期には喜多院点が使用されていたことは周知の事実である。しかし、興福寺においても、東大寺点の点本が伝えられていた形跡のあることが、築島裕氏の研究で明らかになっている。（『平安時代訓點本論考 研究編』四六九頁）

その一つは興福寺藏本大慈恩寺三藏法師傳の永久四（一一一六）年点に点図の断片が二箇所記されており、それが東大寺点の一部と推定されるされるものである。その二つは、天治本新撰字鏡卷十一の末尾に記された点図（次図）で、東大寺点の断片と考えられるものである。



因みに、築島裕氏は、前掲書の中で、前者については「現存點本の祖本に東大寺點が加點されてゐたことを推測させるものである」とし、後者については「天治寫本も、多分、東大寺法相宗邊にその祖點本があつて、それに東大寺點が加點されてゐたのではあるまいか。」と記されている。

ところで、『施諸餓鬼飲食及水法』平安後期書写の本文の奥書に見える「沙門覺隆之本」の覺隆が、先に示したように、興福寺僧覺隆であると仮定すると、法相宗の寺院である興福寺に於いて、喜多院点を専用する以前に、東大寺点が所用されていたことの例証となろうか。

朱点による仮名点については、「瓷」字（一丁オモテ）に「シ」、「泥」字（十二丁オモテ）に「テイ」とある、字音点例の二例のみである。因みに、「テ」の字体は「チ」である。

墨点には、仮名点と校合注とが見られる。

仮名点には、和訓注記三例、字音注記三例が見られる。和訓注記をするものは、「請 ネカハク」(一丁ウラ)、「頭 ハシ」(三丁ウラ)、「困 タシナム」(十丁ウラ)。字音注記例は、「焦」字(十丁オモテ)に「サウ」、「履」字(十二丁オモテ)に「リ」、「楯」字(十二丁オモテ)に「チ」と見えるのみ。因みに、「サ」の字体は「七」である。

『類聚名義抄』には、「請」字に「ネカフ」(法上五九)、「困」字に「タシナム」(法下八五)と見えるが、「頭」字に「ハシ」訓は見えない。因みに、築島裕編『訓点語彙集成』(第六卷五〇五〜五〇七頁)には、百余条の「頭」の「ハシ」訓の類聚が見られる。

築島裕氏の前掲書には見えないものとして、高野山西南院蔵の『无量壽尊念誦次第法』(院政期書写)、『无量壽略念誦法』(永久四年書写)、『馬頭受法壇』(平安後期書写)、『聖燄漫徳迦威怒王立成大神験念誦法』(承暦点)、『蘇悉地羯羅經卷上』(延久三年以前書写)等にも「頭」字に「ハシ」と見られる。

なお、『大毘盧遮那經儀軌』(院政期書写)、『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』(康和点)、『金剛頂經蓮華部心念誦次第』(院政期点)等には、「峯」「岑」字に「ハシ」と見られる。「頭」字「峯」字の「ハシ」訓は関連のあるものであろう。因みに、『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』には、「岑」字に「ハシ(上上)」の差声例がある。詳しくは拙著『高野山西南院蔵訓点資料の研究』(臨川書店)を参照願いたい。

校合注は「婆羅門僊」(十丁オモテ)の「僊」字の右傍に「イ仙」とある一例のみである。

朱点・墨点ともに、加点点例が少なく、国語史料としては、特筆すべきものはないが、書写年代が明らかであり、平安時代後期加点点本としては貴重なものである。又、覚隆が興福寺の僧であれば、興福寺で東大寺点を所用していた例証として、これ又貴重なものである。

大正新修大藏經（第二一卷密教部四、一三一五）に見える本文は、本書の十丁裏一行目までで、二行目以下は見られない。以下に、その本文を示すが、本書の価値を高める点である。

寶勝如來南方寶懺佛 妙色身如來東方阿闍佛 甘露王如來西方无量壽佛 廣博身如來中央毘盧遮那佛 離怖畏如來北方釋迦牟尼佛 夫不列東西南北所以

列南東西北」者其餓鬼者依慳貪報受醜陋形」困福德身也先以布施退除慳貪是」十ウ

故以寶勝如來居第一妙色身如來」者四智中尤理大圓鏡智用万德」圓滿妙色具足也既退除慳貪可受殊勝妙果是故以妙色身如來居第二甘露王如來（者）妙觀察智用說法身」也甘露是妙法故既受妙果堪為法器」便可授法是故以甘露王如來居第三廣博身如來者法界智用遍法界」十一才

身既聽授妙法可使其咽喉開呪」身軀廣大是故以廣博身如來居」第四離怖畏如來者成所作智用」變他身緣六道四生界為一切衆生」作諸事業无怖畏也既得廣博身」可令其身心安樂无怖畏是故以」離怖畏如來居第五」佛部合眼藥真言」十一ウ

唵「□縛攞路者泥テイ莎去縛訶三蓮華部合眼藥真言」唵「弭路枳賴二莎去縛訶三金剛部合眼藥真言」唵畔度履リ楫チ反奴口

尚、本点の本文は、詳細については省略するが、大正新修大藏經の本文と対校すると、大藏經において対校する甲本に一致する場合が多い。例えば、

京女本 先誦此偈至一遍然作請法（一ウ）

藏經本 先誦此偈至心一遍然後作召請法

甲 本 先誦此偈至一遍然作請法

京女本 福无量无边

藏經本 無量無邊福

甲 本 福無量無辺 (四ウ)

京女本 每誦三遍出金剛大道場大明呪經真言曰 (八ウ)

藏經本 每誦三遍真言曰

甲 本 每誦三遍出金剛大道場大明呪經真言曰

京女本 解脫真言云是解脫金剛明誦之度厄也呪曰 (九オ)

藏經本 解脫真言曰

甲 本 解脫真言云是解脫金剛明誦之度厄也呪曰

等々の如くである。しかし、全ての字句が甲本と一致している訳ではない。大藏經本との対校は済ませているが、京女本の本文の詳細については後日を期すこととする。

4

以下に、本点の釈文稿を示す。

施諸餓鬼飲食及水法

大興善寺三藏沙門大廣智不空奉詔譯

施諸餓鬼飲食及水法平安後期点

先(ず)衆生の食事を出(す)。須は法(の)如(くして)周匝(し)て種々に皆着く。並に淨好を須(ゐむ)。或(は)一分或(は)少許或(は)一器に、皆安淨銅(の)器の中に須(む)は法の如(し)。如し銅器无(く)は白瓷亦得。如(し)瓷器无(く)は染器を用(ある)べし。其(の)飲食須は清水に和(し)て、面(は)東に向(き)て立(ち)て坐(し)て亦作法(を)得(べし)「須」。夫(れ)一切の餓鬼に飲食を施(さむ)と欲(は)者、先(ず)須(は)廣大の心を發(す)「べし」「須」。一才

餓鬼を普請(し)て先(ず)此の偈を誦(し)て一遍(に)至(る)。然(し)て請法を作(して)獲(らるる)「所」福利果報校量(す)「べからず」「不可」。苾芻苾芻尼^{某甲}心ヲ發(し)て一器の淨食を奉持(し)て、十方の窮盡虚空周遍法界微塵刹の中に普施(し)て、有(ら)ゆる「所」國土の一切の餓鬼、先(ず)久遠の山川地主、乃至曠野の諸鬼神等に亡(す)。請^{ネカク}は來(り)て此に集(む)。我今悲(み)愍(み)て普(く)汝(に)食(を)施(す)。願(く)は汝各各、我(に)此(の)食を受(け)て、「一ウ

轉(じ)て將に供養(せむとす)。虚空界の諸佛(と)聖(と)「及」を盡(す)。一切情に有(り)。汝と與(に)情(に)有(り)。普(く)皆飽滿(す)。亦願(はくは)汝の身、此の呪食に乗(り)て、苦(を)離(れ)て解脱(す)。天(に)生(れ)て樂を受(く)。十方の淨土に意(に)随(ひ)て遊往(し)、菩提の心を發(し)、菩提の道を行(ふ)。當に求(め)て佛と作(す)「べし」「當」。永(く)退轉(すること)莫(し)。前に道を得(る)と「は」「者」、誓願(し)て度脱(し)、又願(はくは)汝等、晝夜の恒常に我を「於」擁護(し)て我(が)所願を滿(し)、願(はくは)此の食を施(し)て、所生の功德「二才

普(く)將に法界の有情に廻施(し)て、諸の有情(と)「與」平等(と)共(に)有(る)に共(に)諸の情有(る)に、同(じく)此の福を將(ち)て、盡(く)廻向(を)將(ちて)真の如法界の无上の菩提、智智に一切(す)。願(はくは)

速に佛と成(り)て、餘果を招(く)こと勿(れ)と。願(はくは)我此の法は疾く佛と成(る)ことを得。掌(を)合(せて)心に當(て)て、此の偈を誦(し)て印を以(て)召(を)作(して)請(ひ)喉の印を開(く)。右の手の大指と「與」中指(とを)以(て)面^(まのあたり)(に)相(ひ)捻(じ)、餘の三の指は相(ひ)去(り)て微(に)曲勢を作(す)。即(ち)、是(れ)を普(く)集印と名(づ)く」ニウ

呪(して)曰(く)

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय

曩謨保補 哩迦 哩怛 哩怛 他三議哆 耶四

此（の）印を作（り）て此の呪を請（ひ）て一七遍、廣（く）悲（しき）心（しん）を運（び）て、願（はくは）法界微塵刹
 の中の一切（の）餓鬼（を）悉（く）皆雲（の如くに）集（め）（しむ）〔令〕。三才
 又、開地獄門（と）咽喉（と）〔及〕を誦（し）て呪を曰（はく）。

उं शु प्र श रि क न रि न धा म न य

俺
 保
 補
 帝
 哩
 迦
 怛
 哩
 怛
 他
 議
 哆
 耶

此の呪を誦(する)時に左の手を以(て) 食器を執(り)持(ち)て右(の)手(を)以(て) 前の召請(の)印を作(り)喉改(して) 一(たび) 呪を誦(し)、一(たび) 指は彈(く)。大指(と) 中指(と) 〔與(を)以(て) 頭(を)相捻(し)て彈指(し)て聲を作(す)。即(ち) 是の餘の三の指は開(き)て、微曲(を) 梢(くす)。此(れ)、地獄の門を破(り)、及(に) 咽喉を開(く) 印(と) 名(づく)。「三ウ

५
४: स
क न
ए ग
ग व
हृ कि
ज कुं
स र
र सं
र र
रूं

此の呪二六遍(を)誦(す)。一切の餓鬼、各各皆摩伽國の所用(の)〔之〕斛の七々斛(の)〔之〕食を得て、々(食

(し)已(りて)「四才

皆天に生（れ）或（いは）浄土に生（る）ことを得（く）業障を行（は）しむる〔令〕者（は）壽命を消除（し）增長（す）。現世に福を獲（る）无量无边。況（むや）當（に）来（る）（べき）〔當〕（をや）、手印を作（り）て此の加持飲食の呪を誦（し）て、右の手の大指を以（て）中指の甲を摩（る）（こと）三兩遍。三の指は之（を）直（くす）。又、大指を以（て）頭指を捻（り）て、指（を）彈（き）聲を作（す）。一（たび）呪を誦（し）て一（たび）指（を）彈（く）。即（ち）是（なり）。又、甘露法味を蒙（る）呪を誦（して）施无畏（の）印を作（す）か。右の手を以（て）臂を豎（て）て五指を展（べ）て直上（す）。即（ち）「四ウ是（なり）。真言（に）曰（はく）

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय ॥

賀

一七遍(を)誦(ふ)。能(く)飲食(と)水(と)〔及〕を飲(ま)し(め)〔令〕て、變(じ)て无量の乳(と)甘露と〔及〕を成(す)。能(く)一切(の)餓鬼の咽喉を開(き)て、能(く)飲食を(して)、廣(く)增多(することを)得て、平等(とせしむる)〔令〕得(なり)〔也〕。

次(に)誦(して)毘盧遮那一字心水輪觀真言を作(す)。先(ず)此(の) **𑖀** 字(を)想(ふ)。右の手の心の中に以(てす)。猶乳の色(の)如(し)。變(じ)て功德海(と)為(し)て、一切(の)甘露醍醐を流出(す)と。即(ち)手を引(き)、食器(の)上に臨(み)て、此の鍔字十七遍(を)呪(す)。即(ち)展(べて)五の指を開(き)て、下に向(け)て食器の中に臨(み)て「五ウ

觀想乳等字の中(より)〔從〕流(れ)出(づ)。猶日月乳海(の)如(し)と。一切の鬼等皆飽滿(を)得て乏少有(ること)无(し)。此の普(く)一切餓鬼に施(す)印と名(づ)く。真言(に)曰(はく)

𑖀𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑛀𑛁𑛂𑛃𑛄𑛅𑛆𑛇𑛈𑛉𑛊𑛋𑛌𑛍𑛎𑛏𑛐𑛑𑛒𑛓𑛔𑛕𑛖𑛗𑛘𑛙𑛚𑛛𑛜𑛝𑛞𑛟𑛠𑛡𑛢𑛣𑛤𑛥𑛦𑛧𑛨𑛩𑛪𑛫𑛬𑛭𑛮𑛯𑛰𑛱𑛲𑛳𑛴𑛵𑛶𑛷𑛸𑛹𑛺𑛻𑛼𑛽𑛾𑛿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴𑥵𑥶𑥷𑥸𑥹𑥺𑥻𑥼𑥽𑥾𑥿𑦀𑦁𑦂𑦃𑦄𑦅𑦆𑦇𑦈𑦉𑦊𑦋𑦌𑦍𑦎𑦏𑦐𑦑𑦒𑦓𑦔𑦕𑦖𑦗𑦘𑦙𑦚𑦛𑦜𑦝𑦞𑦟𑦠𑦡𑦢𑦣𑦤𑦥𑦦𑦧𑦨𑦩𑦪𑦫𑦬𑦭𑦮𑦯𑦰𑦱𑦲𑦳𑦴𑦵𑦶𑦷𑦸𑦹𑦺𑦻𑦼𑦽𑦾𑦿𑧀𑧁𑧂𑧃𑧄𑧅𑧆𑧇𑧈𑧉𑧊𑧋𑧌𑧍𑧎𑧏𑧐𑧑𑧒𑧓𑧔𑧕𑧖𑧗𑧘𑧙𑧚𑧛𑧜𑧝𑧞𑧟𑧠𑧡𑧢𑧣𑧤𑧥𑧦𑧧𑧨𑧩𑧪𑧫𑧬𑧭𑧮𑧯𑧰𑧱𑧲𑧳𑧴𑧵𑧶𑧷𑧸𑧹𑧺𑧻𑧼𑧽𑧾𑧿𑨀𑨁𑨂𑨃𑨄𑨅𑨆𑨇𑨈𑨉𑨊𑨋𑨌𑨍𑨎𑨏𑨐𑨑𑨒𑨓𑨔𑨕𑨖𑨗𑨘𑨙𑨚𑨛𑨜𑨝𑨞𑨟𑨠𑨡𑨢𑨣𑨤𑨥𑨦𑨧𑨨𑨩𑨪𑨫𑨬𑨭𑨮𑨯𑨰𑨱𑨲𑨳𑨴𑨵𑨶𑨷𑨸𑨹𑨺𑨻𑨼𑨽𑨾𑨿𑩀𑩁𑩂𑩃𑩄𑩅𑩆𑩇𑩈𑩉𑩊𑩋𑩌𑩍𑩎𑩏𑩐𑩑𑩒𑩓𑩔𑩕𑩖𑩗𑩘𑩙𑩚𑩛𑩜𑩝𑩞𑩟𑩠𑩡𑩢𑩣𑩤𑩥𑩦𑩧𑩨𑩩𑩪𑩫𑩬𑩭𑩮𑩯𑩰𑩱𑩲𑩳𑩴𑩵𑩶𑩷𑩸𑩹𑩺𑩻𑩼𑩽𑩾𑩿𑪀𑪁𑪂𑪃𑪄𑪅𑪆𑪇𑪈𑪉𑪊𑪋𑪌𑪍𑪎𑪏𑪐𑪑𑪒𑪓𑪔𑪕𑪖𑪗𑪘𑪙𑪚𑪛𑪜𑪝𑪞𑪟𑪠𑪡𑪢𑪣𑪤𑪥𑪦𑪧𑪨𑪩𑪪𑪫𑪬𑪭𑪮𑪯𑪰𑪱𑪲𑪳𑪴𑪵𑪶𑪷𑪸𑪹𑪺𑪻𑪼𑪽𑪾𑪿𑫀𑫁𑫂𑫃𑫄𑫅𑫆𑫇𑫈𑫉𑫊𑫋𑫌𑫍𑫎𑫏𑫐𑫑𑫒𑫓𑫔𑫕𑫖𑫗𑫘𑫙𑫚𑫛𑫜𑫝𑫞𑫟𑫠𑫡𑫢𑫣𑫤𑫥𑫦𑫧𑫨𑫩𑫪𑫫𑫬𑫭𑫮𑫯𑫰𑫱𑫲𑫳𑫴𑫵𑫶𑫷𑫸𑫹𑫺𑫻𑫼𑫽𑫾𑫿𑬀𑬁𑬂𑬃𑬄𑬅𑬆𑬇𑬈𑬉𑬊𑬋𑬌𑬍𑬎𑬏𑬐𑬑𑬒𑬓𑬔𑬕𑬖𑬗𑬘𑬙𑬚𑬛𑬜𑬝𑬞𑬟𑬠𑬡𑬢𑬣𑬤𑬥𑬦𑬧𑬨𑬩𑬪𑬫𑬬𑬭𑬮𑬯𑬰𑬱𑬲𑬳𑬴𑬵𑬶𑬷𑬸𑬹𑬺𑬻𑬼𑬽𑬾𑬿𑭀𑭁𑭂𑭃𑭄𑭅𑭆𑭇𑭈𑭉𑭊𑭋𑭌𑭍𑭎𑭏𑭐𑭑𑭒𑭓𑭔𑭕𑭖𑭗𑭘𑭙𑭚𑭛𑭜𑭝𑭞𑭟𑭠𑭡𑭢𑭣𑭤𑭥𑭦𑭧𑭨𑭩𑭪𑭫𑭬𑭭𑭮𑭯𑭰𑭱𑭲𑭳𑭴𑭵𑭶𑭷𑭸𑭹𑭺𑭻𑭼𑭽𑭾𑭿𑮀𑮁𑮂𑮃𑮄𑮅𑮆𑮇𑮈𑮉𑮊𑮋𑮌𑮍𑮎𑮏𑮐𑮑𑮒𑮓𑮔𑮕𑮖𑮗𑮘𑮙𑮚𑮛𑮜𑮝𑮞𑮟𑮠𑮡𑮢𑮣𑮤𑮥𑮦𑮧𑮨𑮩𑮪𑮫𑮬𑮭𑮮𑮯𑮰𑮱𑮲𑮳𑮴𑮵𑮶𑮷𑮸𑮹𑮺𑮻𑮼𑮽𑮾𑮿𑯀𑯁𑯂𑯃𑯄𑯅𑯆𑯇𑯈𑯉𑯊𑯋𑯌𑯍𑯎𑯏𑯐𑯑𑯒𑯓𑯔𑯕𑯖𑯗𑯘𑯙𑯚𑯛𑯜𑯝𑯞𑯟𑯠𑯡𑯢𑯣𑯤𑯥𑯦𑯧𑯨𑯩𑯪𑯫𑯬𑯭𑯮𑯯𑯰𑯱𑯲𑯳𑯴𑯵𑯶𑯷𑯸𑯹𑯺𑯻𑯼𑯽𑯾𑯿𑰀𑰁𑰂𑰃𑰄𑰅𑰆𑰇𑰈𑰉𑰊𑰋𑰌𑰍𑰎𑰏𑰐𑰑𑰒𑰓𑰔𑰕𑰖𑰗𑰘𑰙𑰚𑰛𑰜𑰝𑰞𑰟𑰠𑰡𑰢𑰣𑰤𑰥𑰦𑰧𑰨𑰩𑰪𑰫𑰬𑰭𑰮𑰯𑰰𑰱𑰲𑰳𑰴𑰵𑰶𑰷𑰸𑰹𑰺𑰻𑰼𑰽𑰾𑰿𑱀𑱁𑱂𑱃𑱄𑱅𑱆𑱇𑱈𑱉𑱊𑱋𑱌𑱍𑱎𑱏𑱐𑱑𑱒𑱓𑱔𑱕𑱖𑱗𑱘𑱙𑱚𑱛𑱜𑱝𑱞𑱟𑱠𑱡𑱢𑱣𑱤𑱥𑱦𑱧𑱨𑱩𑱪𑱫𑱬𑱭𑱮𑱯𑱰𑱱𑱲𑱳𑱴𑱵𑱶𑱷𑱸𑱹𑱺𑱻𑱼𑱽𑱾𑱿𑲀𑲁𑲂𑲃𑲄𑲅𑲆𑲇𑲈𑲉𑲊𑲋𑲌𑲍𑲎𑲏𑲐𑲑𑲒𑲓𑲔𑲕𑲖𑲗𑲘𑲙𑲚𑲛𑲜𑲝𑲞𑲟𑲠𑲡𑲢𑲣𑲤𑲥𑲦𑲧𑲨𑲩𑲪𑲫𑲬𑲭𑲮𑲯𑲰𑲱𑲲𑲳𑲴𑲵𑲶𑲷𑲸𑲹𑲺𑲻𑲼𑲽𑲾𑲿𑳀𑳁𑳂𑳃𑳄𑳅𑳆𑳇𑳈𑳉𑳊𑳋𑳌𑳍𑳎𑳏𑳐𑳑𑳒𑳓𑳔𑳕𑳖𑳗𑳘𑳙𑳚𑳛𑳜𑳝𑳞𑳟𑳠𑳡𑳢𑳣𑳤𑳥𑳦𑳧𑳨𑳩𑳪𑳫𑳬𑳭𑳮𑳯𑳰𑳱𑳲𑳳𑳴𑳵𑳶𑳷𑳸𑳹𑳺𑳻𑳼𑳽𑳾𑳿𑴀𑴁𑴂𑴃𑴄𑴅𑴆𑴇𑴈𑴉𑴊𑴋𑴌𑴍𑴎𑴏𑴐𑴑𑴒𑴓𑴔𑴕𑴖𑴗𑴘𑴙𑴚𑴛𑴜𑴝𑴞𑴟𑴠𑴡𑴢𑴣𑴤𑴥𑴦𑴧𑴨𑴩𑴪𑴫𑴬𑴭𑴮𑴯𑴰𑴱𑴲𑴳𑴴𑴵𑴶𑴷𑴸𑴹𑴺𑴻𑴼𑴽𑴾𑴿𑵀𑵁𑵂𑵃𑵄𑵅𑵆𑵇𑵈𑵉𑵊𑵋𑵌𑵍𑵎𑵏𑵐𑵑𑵒𑵓𑵔𑵕𑵖𑵗𑵘𑵙𑵚𑵛𑵜𑵝𑵞𑵟𑵠𑵡𑵢𑵣𑵤𑵥𑵦𑵧𑵨𑵩𑵪𑵫𑵬𑵭𑵮𑵯𑵰𑵱𑵲𑵳𑵴𑵵𑵶𑵷𑵸𑵹𑵺𑵻𑵼𑵽𑵾𑵿𑶀𑶁𑶂𑶃𑶄𑶅𑶆𑶇𑶈𑶉𑶊𑶋𑶌𑶍𑶎𑶏𑶐𑶑𑶒𑶓𑶔𑶕𑶖𑶗𑶘𑶙𑶚𑶛𑶜𑶝𑶞𑶟𑶠𑶡𑶢𑶣𑶤𑶥𑶦𑶧𑶨𑶩𑶪𑶫𑶬𑶭𑶮𑶯𑶰𑶱𑶲𑶳𑶴𑶵𑶶𑶷𑶸𑶹𑶺𑶻𑶼𑶽𑶾𑶿𑷀𑷁𑷂𑷃𑷄𑷅𑷆𑷇𑷈𑷉𑷊𑷋𑷌𑷍𑷎𑷏𑷐𑷑𑷒𑷓𑷔𑷕𑷖𑷗𑷘𑷙𑷚𑷛𑷜𑷝𑷞𑷟𑷠𑷡𑷢𑷣𑷤𑷥𑷦𑷧𑷨𑷩𑷪𑷫𑷬𑷭𑷮𑷯𑷰𑷱𑷲𑷳𑷴𑷵𑷶𑷷𑷸𑷹𑷺𑷻𑷼𑷽𑷾𑷿𑸀𑸁𑸂𑸃𑸄𑸅𑸆𑸇𑸈𑸉𑸊𑸋𑸌𑸍𑸎𑸏𑸐𑸑𑸒𑸓𑸔𑸕𑸖𑸗𑸘𑸙𑸚𑸛𑸜𑸝𑸞𑸟𑸠𑸡𑸢𑸣𑸤𑸥𑸦𑸧𑸨𑸩𑸪𑸫𑸬𑸭𑸮𑸯𑸰𑸱𑸲𑸳𑸴𑸵𑸶𑸷𑸸𑸹𑸺𑸻𑸼𑸽𑸾𑸿𑹀𑹁𑹂𑹃𑹄𑹅𑹆𑹇𑹈𑹉𑹊𑹋𑹌𑹍𑹎𑹏𑹐𑹑𑹒𑹓𑹔𑹕𑹖𑹗𑹘𑹙𑹚𑹛𑹜𑹝𑹞𑹟𑹠𑹡𑹢𑹣𑹤𑹥𑹦𑹧𑹨𑹩𑹪𑹫𑹬𑹭𑹮𑹯𑹰𑹱𑹲𑹳𑹴𑹵𑹶𑹷𑹸𑹹𑹺𑹻𑹼𑹽𑹾𑹿𑺀𑺁𑺂𑺃𑺄𑺅𑺆𑺇𑺈𑺉𑺊𑺋𑺌𑺍𑺎𑺏𑺐𑺑𑺒𑺓𑺔𑺕𑺖𑺗𑺘𑺙𑺚𑺛𑺜𑺝𑺞𑺟𑺠𑺡𑺢𑺣𑺤𑺥𑺦𑺧𑺨𑺩𑺪𑺫𑺬𑺭𑺮𑺯𑺰𑺱𑺲𑺳𑺴𑺵𑺶𑺷𑺸𑺹𑺺𑺻𑺼𑺽𑺾𑺿𑻀𑻁𑻂𑻃𑻄𑻅𑻆𑻇𑻈𑻉𑻊𑻋𑻌𑻍𑻎𑻏𑻐𑻑𑻒𑻓𑻔𑻕𑻖𑻗𑻘𑻙𑻚𑻛𑻜𑻝𑻞𑻟𑻠𑻡𑻢𑻣𑻤𑻥𑻦𑻧𑻨𑻩𑻪𑻫𑻬𑻭𑻮𑻯𑻰𑻱𑻲𑻳𑻴𑻵𑻶𑻷𑻸𑻹𑻺𑻻𑻼𑻽𑻾𑻿𑼀𑼁𑼂𑼃𑼄𑼅𑼆𑼇𑼈𑼉𑼊𑼋𑼌𑼍𑼎𑼏𑼐𑼑𑼒𑼓𑼔𑼕𑼖𑼗𑼘𑼙𑼚𑼛𑼜𑼝𑼞𑼟𑼠𑼡𑼢𑼣𑼤𑼥𑼦𑼧𑼨𑼩𑼪𑼫𑼬𑼭𑼮𑼯𑼰𑼱𑼲𑼳𑼴𑼵𑼶𑼷𑼸𑼹𑼺𑼻𑼼𑼽𑼾𑼿𑽀𑽁𑽂𑽃𑽄𑽅𑽆𑽇𑽈𑽉𑽊𑽋𑽌𑽍𑽎𑽏𑽐𑽑𑽒𑽓𑽔𑽕𑽖𑽗𑽘𑽙𑽚𑽛𑽜𑽝𑽞𑽟𑽠𑽡𑽢𑽣𑽤𑽥𑽦𑽧𑽨𑽩𑽪𑽫𑽬𑽭𑽮𑽯𑽰𑽱𑽲𑽳𑽴𑽵𑽶𑽷𑽸𑽹𑽺𑽻𑽼𑽽𑽾𑽿𑾀𑾁𑾂𑾃𑾄𑾅𑾆𑾇𑾈𑾉𑾊𑾋𑾌𑾍𑾎𑾏𑾐𑾑𑾒𑾓𑾔𑾕𑾖𑾗𑾘𑾙𑾚𑾛𑾜𑾝𑾞𑾟𑾠𑾡𑾢𑾣𑾤𑾥𑾦𑾧𑾨𑾩𑾪𑾫𑾬𑾭𑾮𑾯𑾰𑾱𑾲𑾳𑾴𑾵𑾶𑾷𑾸𑾹𑾺𑾻𑾼𑾽𑾾𑾿𑿀𑿁𑿂𑿃𑿄𑿅𑿆𑿇𑿈𑿉𑿊𑿋𑿌𑿍𑿎𑿏𑿐𑿑𑿒𑿓𑿔𑿕𑿖𑿗𑿘𑿙𑿚𑿛𑿜𑿝𑿞𑿟𑿠𑿡𑿢𑿣𑿤𑿥𑿦𑿧𑿨𑿩𑿪𑿫𑿬𑿭𑿮𑿯𑿰𑿱𑿲𑿳𑿴𑿵𑿶𑿷𑿸𑿹𑿺𑿻𑿼𑿽𑿾𑿿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂

ॐ नमो भगवते वासुदेवाय

曩 謨 婆 譏 縛 帝 蘇 嚕_{合二} 波 耶 怛 他 譏 多 耶

१ २ ३ ४ ५ ६ ७ ८ ९ १० ११ १२ १३ १४ १५ १६ १७ १८ १९ २० २१ २२ २३ २४ २५ २६ २७ २८ २९ ३० ३१ ३२ ३३ ३४ ३५ ३६ ३७ ३८ ३९ ४० ४१ ४२ ४३ ४४ ४५ ४६ ४७ ४८ ४९ ५० ५१ ५२ ५३ ५४ ५५ ५६ ५७ ५८ ५९ ६० ६१ ६२ ६३ ६४ ६५ ६६ ६७ ६८ ६९ ७० ७१ ७२ ७३ ७४ ७५ ७६ ७७ ७८ ७९ ८० ८१ ८२ ८३ ८४ ८५ ८६ ८७ ८८ ८९ ९० ९१ ९२ ९३ ९४ ९५ ९६ ९७ ९८ ९९ १००

ਕ
ਖ਼
ਗ
ਗ
ਘ
ਙ
ਚਿ
ਚੁ
ਲੁ
ਲਾ
ਮ
ਨ
ਪ
ਪ
ਫ
ਫ
ਬ
ਬ

व
अ
रु
ग
व
अ
अ
रु
हं
क
रु
य
न
व
ग
न
य

行者若(し)能(く)此(の)如(く)ならば、為に五如来の名を稱(ふる)者、佛の威光を以(て)加(へて)彼を(おし)

被(る)。故(に)能(く)一切の餓鬼等を(して)〔令〕、无量罪を(して)滅(し)、无量福を生(き)(しむ)〔令〕。妙色、廣博(を)得(て)怖畏无(き)を得(る)所の飲食、甘露美妙(の)〔之〕食と成(し)、速離苦の身を變(じ)て天と淨土と生(る)。若(し)「八才

食を施(し)已(り)て、行者當に更に諸の鬼神等の為に、菩薩の三昧耶戒の陀羅尼を受(く)。毎(に)三遍を誦(する)に、金剛太道場大明呪經に出(づ)。真言(に)曰(はく)

ॐ म म प च

唵 三 昧 耶 薩 埵 鑊

三遍(を)誦(し)已(は)りて、一切の鬼神皆得(て)甚深の秘法を堪(へ)聞(く)に、盡(く)具足三昧耶戒獲无量の福を得て、已(に)諸の餓鬼に施(し)、悉(く)皆飽滿(し)訖(りぬ)。當に「八ウ

須(く)は陀羅尼(の)法を以(て)撥遣(し)て方(に)本所に〔於〕歸(る)ことを得(べし)〔當〕。撥遣解脱(の)真言(に)云(はく)。是(れ)解脱金剛明と(いふ)。又、厄を度(す)(なり)〔也〕。呪(に)曰(はく)。

ॐ व ह म च म

唵 縛 曰 羅 二 合 母 訖 叉 穆

若(し)撥遣呪を誦(す)れは、先(ず)印を作(す)。右の手を以(て)拳に作(し)て、大指を以(て)頭指を捻(じ)て、掌を仰(き)て弾指(し)て聲を作(す)。是を撥遣契と名(づく)。毎に食を寫(し)了(りぬ)。誦(し)て一七遍。弾指(す)。「九才

能く一切の鬼神に此の食を得しむ〔令〕。已に當に去ることを得る（へき）〔當〕（なり）〔也〕。不撥遣の若（きは）去（る）ことを得（ざる）〔不〕（なり）〔也〕。不具足（の）若（し）。是（の）如（き）法を（は）〔者〕諸の餓鬼に施（す）に皆周匝（することを）得（ず）〔不〕。或（いは）得（る）者有（り）。或（いは）得（ざる）〔不〕者有（り）。用（を）虚（しくし）力を功（にし）深（く）愍（む）（へけむ）〔可〕（や）〔哉〕と。若（し）行者有（り）て菩提心を發（し）て、能（く）是（の）如（く）具足（して）此（の）法を脩行（して）諸の餓鬼に施（す）者、一切の餓鬼皆飽満を得（て）、乏少有（ること）无（し）。持法（の）〔之〕人悉（く）之を知（る）（べし）〔應〕。若（し）加持飲食（の）九ウ

陀羅尼を以（て）一器の淨食を加持（して）淨（き）流水の中に寫（す）。能（く）一切の婆羅門僇（を）（して）〔令〕皆此（の）食を得（しむ）〔令〕。々々〔食〕（し）已（はり）て異口同音にて呪の願、此（の）人現世の中に〔於〕即（ち）延壽を得。其の人梵天の威徳を具足（して）、梵天の行を行（ふ）。若（し）は此（の）呪を以（て）、一切（の）供養佛に物を呪（す）。若（し）は水、若（し）は香花、食を飯（らひ）、皆二十一遍（を）呪（し）て、然（し）て後に佛に供養（す）。即（ち）〔是の〕如（くし）て種種に供養の十方の一切の諸佛无異（を）以（て）、焦面餓鬼一切鬼神陀羅尼經の要訣餓鬼義（に）施（すこと）あり。」十ウ

寶勝如来南方寶懺佛

妙色身如来東方阿閼佛

甘露王如来西方无量壽佛

廣博身如来中央毘盧遮那佛

離怖畏如来北方釋迦牟尼佛

夫（れ）東西南北と列（せ）〔不〕（し）て、南東西北と列（するを）以（てする）所（の）者、其（の）餓鬼者は慳貪の報は依（りて）醜の陋形を受（く）。餓鬼苦に困タシナム寶勝如来者平等（なり）。正智の用、福德の身（なり）〔也〕と。先（ず）布施を以（て）、慳貪（を）退除（す）。是（の）十ウ

故（に）寶勝如来を以（て）第一に居（す）。妙色身如来者、四智の中近き理に无（き）大圓（にして）、鏡智の用、万徳圓滿妙色具足（なり）〔也〕。既に慳貪を退除（して）、殊勝の妙果を受（く）（べし）〔可〕。是（の）故（に）妙色身

如来を以（て）第二に居（す）。甘露王如来者、妙觀察智の用、説法の身（なり）〔也〕。甘露は是（れ）妙法（なり）。故（に）既に妙果を受（け）て、堪え（て）法器と為（す）に法を授（く）（べからしむ）〔使可〕。是（の）故（に）甘露王如来を以（て）第三に居（す）。廣博身如来者、法界智の用、遍法界の「十一才

身既に妙法を聴（き）授（く）。其（の）咽喉（は）身軀を開寛（し）廣大（なら）（しむべし）〔可使〕。是（の）故（に）廣博身如来を以（て）第四に居（す）。離怖畏如来者、成所作智の用、他身經六道四生界に變（す）。一切衆生の為（に）諸事業を作（し）て怖畏无（き）（なり）〔也〕。既に廣の博身を得て、其の身心安樂に（し）て怖畏无（から）（しむべし）〔可令〕。是（の）故（に）離怖畏如来を以（て）第五に居（す）。佛部合眼藥真言「十一ウ

唵□○嚩囉路者泥^テ莎^去合嚩訶^三

蓮華部合眼藥真言

唵「弭路枳頼」莎^去合嚩訶^三

金剛部合眼藥真言

唵呬度履^反拑^反跋^北羂莎^去合縛訶^三

「十二才

「十二ウ

仁安四年三月廿八日申時□□之了／一交了／一點□／沙門覺隆□□「十三才

（本学教授）